スローテンポ通信

第　29　号

2019 年 8 月 23 日
発行:一般社団法人スローテンポ協会
〒329-0403 栃木県下野市医大前 3-7-4-3F
☎　0285-35-2888
Eメール usagimokamemo@gmail.com
ブログ『うさぎもかめも』
http://usagimokamemo.blog.fc2.com/

ベストセラーばかりが面白いとは限らない
スローテンポ書店
営業：火～土 13 時～19 時
日月祝日休み

☆　今月のおすすめ

（いずれもブログで紹介しています）

○『ぷかぷかな物語』

――障がいのある人と一緒に、
今日もせっせと街を耕して――

高崎明著　現代書館 2019 年　￥1,700＋税

☆☆☆☆★

障がい者にほれ込んだ著者が、一緒にパン屋をつくる物語。障がい者とともに過ごすときの幸福感を教えてくれる。
「社会が障がい者を排除してしまうから、私たちは、障がい者と向きあう機会をなくしている」という言葉は重い。

○『出生前診断　受ける受けない　誰が決めるの？』

山中美智子、玉井真理子、坂井律子　編著
生活書院 2017 年　2200 円+税

☆☆☆☆

賛成、反対などの一方的意見が飛び交う出生前診断。一つの考え方を押し付けることなく、欧米の事情やその考え方を公平に紹介する。出生前診断を冷静にとらえようとする読者にはおすすめだ。

○『ことばのバリアフリー』

情報保障とコミュニケーションの障害学
あべ・やすし著
生活書院　2015 年　2000 円＋税

☆☆☆☆★

行政サービスは、**ことば**を使いこなせることが前提であり、**ことば**に障害のある人を排除してきた。この本は、障害を抱える人が社会参加するうえで、日本社会に存在する障害を整理する。

大切なのは、障がい者たちと一緒に過ごすことです

読者から、ブログの記事がよかったという声がありました。**『ぷかぷかな物語』**高崎明著（今月のおすすめ）の紹介記事です。抜粋して紹介します。

この本は、障がい者たちにほれ込んだ著者が、一緒になって社会参加をする物語です。

著者は、30 歳の時に会社を辞め、障がい者支援の仕事に就きます。そこでの出会いが、著者のその後の人生を一変させます。

最初の勤務先は、養護学校です。そこにいた重度の障がい児は、手のかかる子でしたが、著者の心をわしづかみにします。

この幸福感は一体何だろうか。「障がい者は劣っていて、健常者は優れている」という、それまで当たり前に思っていたことがぐらつきます。

今まで優れているはずの健常者のそばにいて、こんな幸福感は味わったことがありませんでした。いつしか「この子たちと一緒に生きて行きたいなあ」と思うまでになります。

著者が障がい者に惚れ込んだ理由について、この本には書かれていませんでしたが、私は想像します。

著者は競争社会を必死で生き抜き、精神的に追い詰められた状況にあったのではないでしょうか？　加えて、著者には障がい者と一緒に過ごす経験がなかったのだと思います。

人間が本来持つ大切なものを素直に出し、あるべき姿をそのまんま生きている障がい者だからこそ、著者のボロボロになった心を癒してくれたのでしょう。

さて、著者は養護学校の日々が余りにも楽しかったため、この幸せがいつまで続くかが不安になります。定年を迎えれば、楽しい生活がなくなってしまう。これは、幸せ過ぎる人にふとよぎる不安なのかもしれません。

そんな著者は、障がい者とともにパン屋をやることを思いつきます。定年の 2 年前には NPO 法人を立ち上げ、その半年後には、空き店舗活用に関する市の募集に応募し助成金も得ます。

しかし、開業資金がたりません。それで著者は自分の退職金すべてをつぎ込みます。

そして退職直後の 2010 年 4 月、ついにパン屋「カフェベーカリー**ぷかぷか**」がオープンします。そこで働く障がい者を、支援スタッフたちは「**ぷかぷか**さん」と呼びました。

ところが、近隣の理解が得られないため赤字が続き借金が膨らみます。**ぷかぷか**さんが店先で「いらっしゃいませ！」と呼び込みをすると、「うるさい！」とどなられたり、障がい者がうろついたりすると、苦情の電話も受けました。

ひたすらあやまっていると、支援する人もでき、そのうち「**ぷかぷか**」のファンも生まれました。かつての著者と同じように、障がい者とともに過ごすときの幸福感に気付いてくれたのです。

ぷかぷかさんたちが接客の練習をするときのエピソードがあります。

専門家がマニュアルを用意し、その台本通りにやってみるのですが、著者は、何かがおかしいと感じます。

ぷかぷかさんたちに任せ自由にやってもらったら、とても自然で、かれらの気持ちとエネルギーが伝わってきました。**ぷかぷか**さんたちを社会に合わせるのではなく、ありのままがいいということに気付くのです。

マニュアルは、人と人との交流をなくし、笑顔さえ機械的で冷たいものにしてしまいます。

この本は「相模原障害者殺傷事件」に触れながら訴えます。

「社会が障がい者を排除してしまうから、私たちは、障がい者と向きあう機会をなくしている。大事なことは、彼らと過ごし、彼らと一緒に何かをつくり出し、それを楽しむことだ。」

多くの人がこの本を読んで、障がい者たちと一緒に暮らすことが、社会を豊かにするということを、知ってほしいと思います。　　いつか七味

正しく伝えて人とつながる　実用文教室

文章は正確です。参加者が書いた文章を持ち寄って、言いたいことが伝わっているかどうかを確認し合います。

木曜日**午後 3 時～5 時**
参加費は資料代含めて、1 回 500 円。

どなたも歓迎　懇話会

人との対話が社会参加の第一歩です。
参加者から話題を提供してもらい、後半は課題をしぼって話し合います。
水曜日**午後 5 時～7 時**、参加無料。